

## 埼玉県腸管出血性大腸菌検出状況(2015)

埼玉県で2015年に分離され衛生研究所で確認した腸管出血性大腸菌は137株と昨年の220株より減少しました。分離された137株の血清型・毒素型別を表に示しました。最も多く検出された血清型は例年通りO157:H7で69株(50.4%)、次いでO26:H11が48株(35.0%)、O157:H-が13株(9.5%)であり、その他の血清型の検出数はそれぞれ2株以下でした。毒素型で特徴的だったのは、従来O26:H11はVT1単独産生株が大半を占めていたのに対し、2015年は半数以上の26株がVT1&2産生株だったことです。この型は、2011年に3株分離されて以降分離されていませんでした。また、O157:H7では同居する家族2名がそれぞれ異なる毒素型(VT1&2とVT2)を分離した例がありました。

分離された137株のうち34株(24.8%)は患者発生に伴う家族検便や給食従事者に対する定期検便で非発症者から検出されたものでした。

分離された腸管出血性大腸菌の血清型・毒素型別検出数(2015)

血清型	毒素型			計
	VT1	VT2	VT1&2	
O157:H7		31	38	69
O157:H-	1	10	2	13
O26:H11	22		26	48
O111:H-			1	1
O91:H14	1			1
O91:H-	1			1
O145:H-		1		1
O165:H-			1	1
O186:H2	2			2
	27	42	68	137

分離株のPFGE法による遺伝子型別では、O157:H7は69株が39の型に型別され、次いで多く分離されたO26:H11は48株が15の型に型別されました。O157:H7では、明らかな集団感染事例はなかったものの、家族内感染以外に、異なる保健所管内で同一パターンを示す例が複数例ありました。O26:H11は、VT1&2産生株26株中21株が同一あるいは類似したパターンを示しましたが、これらは集団感染事例由来のものでした。

県内の流行状況の把握及び感染原因の究明には、分離株の検査情報は欠かせません。今後とも、分離株の送付に御協力ください。